●二人で味わう古典和歌（120）

岩戸あけし天つ尊（みこと）のその上（かみ）に桜を誰（たれ）か植ゑ始めけん

西行

天の岩戸を開けて光をもたらして下さった天照大神の神代に、いったい誰が桜を植え始めたのだろうか。

西行自身の手によってこれまでに詠んだ歌を左右に番えた自歌合（じかあわせ）「御裳濯川歌合（みもすそがわうたあわせ）」の巻頭に置かれた作。伊勢神宮の内宮に奉納するのに相応しく、記紀神話の岩戸開きに基づいて詠まれている。岩戸に隠れてしまった天照大神が無事、外の世界へ戻られたので暗闇に包まれた世にふたたび光が降り注いだという。こうして美しい桜が見られるのも、天照大神が国土を照らしてくれているからだと遙かな存在へ還元される謝意は、いかにも西行らしい。満開の桜の木のなかの始めの一木へ到る思いには、高天原から地上に降り立った神々の原初の営みが想像されていただろう。

同じ自歌合には「なべてならぬよもの山べの花はみな吉野よりこそ種はちりけめ」（あたり一面の格別に美しい山辺の桜の花はみな吉野から種が散っていったのである）という歌もあり、生涯愛着を持って世に広めた吉野を、桜誕生の地とことだてする。

神路山（かみぢやま）月さやかなるちかひありて天の下をばてらすなりけり

「御裳濯川歌合」において掲出歌と番われているのがこの歌。内宮の神苑である「神路山」にある月が、大日如来像の衆生済度の誓願によってこの世を照らしているという。いずれも日によって、月によって、神によって地上が照らされることを言祝いでいる。判詞は藤原俊成が付けており「左の歌は、春の桜を思ふあまり、神代の事までたどり、右歌は、天の下をてらす月を見て、神路山のちかひをしれる心、ともにふかく聞ゆ、持とすべし」として優劣つけがたい持（じ）（引き分け）としている。

天岩戸が和歌に読み込まれるのはめずらしい。桜を愛する西行の眼には花の美しさを超えて、この地上に命が在ること、巡る縁のひとときに結びつく特別な意味を持つ花であった。『西行上人集』収載。

（小島なお）